

## 枠組みづけの内的構造——『言語と呪術』を読む

小 野 純 一

### 1 はじめに

言語の発生を呪術・宗教との同時発生に見る仮説は、これまでも考古学・人類学・哲学などにおいて提出されてきた（Donovan 1891–1892, Langer 1942）。しかし井筒俊彦（1914–1993）は自身初の英文著作『言語と呪術』（1956年）においてその見解を批判的に継承し、より根源的な水準における発生を見極めようとする<sup>1</sup>。井筒の批判によれば、彼以前の研究では標準化された形式の呪術しか前提にされていない（井筒 2018: 178）。そのように形式へと伝統的に固定された儀式ではなく、あらゆる形式を真に主体的な体験にしている究極的な源泉まで辿ったマリノフスキーは言語の発生を熱狂的な体験にまで遡った（同上 179）。それをこの人類学者は「自発的な儀礼」と呼び、そこに意味の発生を見たのである（同上 92, Malinowski 1923）。井筒もまたこの意味の発生の場を「自発的な儀礼」としての呪術と考え、言語の呪術的な働きを解き明かして行く。井筒の独創性は、言語あるいは意味の発生を言語自体に内在する枠組み、あるいは構造と捉えた点である。その意義はこれまで指摘されることはなかった。そこで本稿は、井筒が見出す言語的枠組みという構造が何かを明らかにする。

先行研究に関しては、井筒の『言語と呪術』を主眼的として研究対象にし

---

<sup>1</sup> 本稿では原著の新しい校訂版（Izutsu, Toshihiko, *Language and Magic: Studies in the Magical Function of Speech*, Keio University Press, 2011）に基づく拙訳（井筒俊彦『言語と呪術』安藤礼二（監訳）、小野純一（訳）、慶應義塾大学出版会、2018年）で参照箇所を指示する。

た論考は、和訳の監修者である安藤礼二によるもののみであると思われる（長岡 2018）<sup>2</sup>。安藤は人類学・民俗学の側面に重点を置いて論じている。安藤も引用するように（安藤 2018: 246–247）、井筒の『言語と呪術』は言語学の第一人者であるヤコブソンによって同時代的に極めて高い評価を受け、この言語学者の強い推薦によって、ロックフェラー財団から二年間の資金が出て海外研究に井筒は行くことができた、井筒豊子が明かしている（井筒豊子 2017: 6）。その後もエラノス会議の主催者から井筒の専門分野を「哲学的意味論」とするという通達があった（澤井 2018: 245–246）。つまり、井筒は日本国外では意味論学者・言語学者・言語哲学者と考えられていたと言ってよからう。

事実、これから論じるように、井筒の『言語と呪術』は言語理論として先駆的であり、一般言語理論における現在の議論とも通底する面を有していると思われる。そこで、以下では本稿の観点から、すなわち井筒の考える言語自体に内在する枠組み、あるいは構造がなんであるかという点から、まずは『言語と呪術』の構成と主張をまとめながら、論点を絞って行くことにする。人類学や民俗学からの意義は安藤の論考によってすでに詳らかにされているので、本稿は井筒が着目する構造規定の性質を取り上げつつ、私の重視する観点から批判を試みる。それを通して、『言語と呪術』の観点・議論の何が一般言語理論の現在と共有されるのかを指摘しつつ、それをいかに継承し、その観点を事例研究の指針とし、その観点によってさらに言語そのものの研究へと進み、ひいては人間知性そのものへ赴くことが可能なのかという見通しを検討したい。

## 2 言語と呪術との関係

第1章で『言語と呪術』は言語の本源的な形成力を主題とすることが明示

<sup>2</sup> 例えば、安藤（2014a: 81–88）。これを基にしたものが、安藤（2014b）。さらに、この改訂版は、増補されて井筒俊彦『言語と呪術』（慶應義塾大学出版会、2018年）の解説「井筒俊彦の隠された起源」として収められている安藤（2018）。

される。明示の仕方として、井筒は時間上の歴史的な源泉としての言語起源、および非時間上の非歴史的な起源である、機能の起源、言語活動のより基礎的な側面との区分を言及する。後者の基礎的側面における発話<sup>スピーチ</sup><sup>3</sup>の諸機能の階層化が、第1章の目的であることが言明される（井筒 2018: 6）。井筒は「言語の仕組みの根底にある心の諸過程」とは象徴を形成して、情緒、つまり心の様態を表出する仕組みであり、言葉の働きの効果は情緒表現のもたらす効果であると言う（同上 19）。その仕組みを論じることが本書の核心であることが宣言される（同上 20）。

ここで井筒の先駆的な一面が知られる。この書の出版は1956年であるが、その元となった講義は1951年から数年にわたって行われている。したがって構想や準備はそれをさらに遡ることになる。この時期、言語起源の研究は世界的にも依然として避けられていた。チョムスキー理論が紹介されて久しい1990年代においても言語起源を問うべきでないと主張する一部の言語学者が残っていたようである<sup>4</sup>。しかしすでに1950年代には幾人かの言語学者が起源論の方法論的問題に気づき、方法論を作新する運動が開始されていた。それがチョムスキーの著作として公表され広く知られて行くのは1957年以降であり、井筒の出版はそれと相前後する点で先駆的である<sup>5</sup>。しかし先駆

<sup>3</sup> 拙訳では speech を極力、言語と訳すことにした。『言語と呪術』は確かに言語行為論が一般化する以前の刊行であるが、扱う主題は言語行為であり、一部、発話とした方が良いと思われる場合を除いて、井筒の用法は言語行為論における「言語 (speech)」と「発話 (utterance)」という薬師わけに対応する観点を有すると考えた。「言語」と訳さない場合の「言語」は基本的に language に、発話としない場合の「発話」は utterance に、「発する」はその動詞形に対応する。なお「言葉の呪術」ともいう magic of word は統一的に言語呪術とした。

<sup>4</sup> 言語起源論を近代言語学の成立時期から20世紀言語学および言語哲学の様々な動向まで網羅的に紹介する優れた論考に坂本 (1991) がある。

<sup>5</sup> とはいえ、実際には、チョムスキーの卒業論文（ペンシルベニア大学、1949年）が元となったその改訂版の修士論文（同、1951年）、それをより一般化した論文（Chomsky 1953）は井筒の言語学講義には先立っている。しかしこれは構造主義に基づく記述言語学であった。生成文法として知られるようになる理論はすでに『言語理論の論理構造』(The Logical Structure of Linguistic Theory) の草稿として1955年に成立し（ただし最終的に1975年に刊行）、その一部が博士論文として提出された（ペンシルベニア大学、1955年）。この草稿の概略を含む Chomsky (1957)、Chomsky (1965) によってチョムスキーの理論を世界に知られて行く（福井直樹・辻子美保子 2017: 186–189）。

性は本質的重要をもたない。方法論の転換、共時論的転換に真の意義がある。共時化の態度は井筒においてすでにこの時点で明確であることもまた知られる。

1950年代、後に当事者たちによって「認知革命」と呼ばれる革新的な運動が井筒の言語研究とはおそらく個別に同時並行して勃興していたことになる(チョムスキー 2012: 2)。井筒もチョムスキーもともに当時支配的であった行動主義が行き過ぎている点に批判を向け、また生物学、考古学、人類学の成果を慎重に検討している点で共通している。それは生物言語学という名称のもと言語の起源を時間軸に探究すると共に人間本性に定位する試みでもある<sup>6</sup>。大陸系言語学、言語論を排除することなく、加えてイギリス経験論の言語論的成果を取り入れて、歴史的起源論を本性的起源論へ転換している点でも両者は共通している。その方法論の態度、共時的観点は基軸として『言語と呪術』を貫く<sup>7</sup>。この書の探究は言語の発生を時間軸上の起源に求めることは否定しないとはいえ、太古の人類発生時の言語的状况を仮説的に描き出す場合も歴史的起源の探究というより—その意義を否定するのではないが—、本性における起源の究明を目指す。

ただ本来性において、発生の根拠において、歴史的起源も本性的起源も違わない。それゆえ、井筒は言語の根拠を言語的枠組みに見出すが、その豊富な事例は古代の呪文や神話から採取できるので、第2章と第3章はそれら歴史的事例研究に当てられる。歴史的に遡りうるより古い資料に十全に言語的枠組みが定型文として現れていること、その定型文が言語発生の根拠の根拠であることを豊富な事例を持って井筒は示そうとする。古代において呪文・定型文は超感覚的な力の宿る乗り物であったことが世界各地の神話から示される。神々は呪文・定型文で世界を統治するどころか、神々をも凌駕する力

<sup>6</sup> 生物言語学の名称は2000年代になって一般化するが、着想はすでに1950年代に、全面展開は1960年代に Lenneberg (1967) によりなされている。

<sup>7</sup> 『言語と呪術』が「人間の心の本性および知の構造を究明しようとする」ものであり(井筒 2018: 6)、それは言語がまさに心の基礎構造(同上 10)、情緒を表現すること(同)、経験を象徴化して心に提供する傾向(同上 15)と不可分であることを示している。

を有すると考えられていた（井筒 2018: 32）。すなわち、知性の下位段階では言語構造の諸パターンと世界の構造とに因果関係を見出し、記号と指示対象とを混同することが、人類に普遍的な傾向として現実化していることを井筒は示そうとする（同上 34）。

その混同は太古に限定されるのではなく人類である限り常に介在すると井筒は考えているように思われる。そのような混同が生じる原因を第 5 章で探る前に井筒は、第 4 章で彼の考える言語構造の諸パターン、言語的枠組みで何を意味しようとしているのかを整理する。その結果得られた探究すべき点が第 6 章から最終章の第 11 章までで論じられる。つまり、第 4 章は本書の構成と主張の見通しを与えている。まず、「枠組み」は特別な語調や情緒的な言い回しによって言語が日常から非日常へ転換する装置となっている（同上 74）。つまり修辭的な強調が発生論的に見た呪術の根拠であることが示唆される（同上 79）。修辭的には断言・宣誓の形式が言葉の拘束力（枠組み）の力を実現させるが、その実現は厳肅かつ張り詰めた状況（言語形式としても儀式としても）によって確かとなる（同上 80）。井筒は、呪術を三つに分ける。第一は意味論的構成、第二は呪文や宣誓などの言語記号で標準化された呪術、第三は両者の中間で強烈な欲望や感情の自発的な現れ、である（同上 88）。第 5 章では第一の意味論的構成という意味での呪術に集中する。

### 3 〈意味〉体験と構造

物を名付けることが〈意味〉体験を構成している（同上 91）。物を名付けることが標準化された呪術ではなく本来性において呪術的であるのは、次の理由による。物の名を呼ぶことによって、つまり言葉を媒介とすることによって、当の物が自分のところに来るという体験が子供に生じる。子供にとって最初の言語体験、意味体験である。それは言語（スピーチ）によって内心を発露し周囲に命令をし、物を召喚できるという効果である。この場合、動詞の命令形に限らずいかなる文法形式であろうと、声を出すことが、つまりあらゆる言葉が命令機能を担っている（同上 93）。ここから言葉が物の代用のよ

うに理解されえようが、井筒は言葉が心象の代わりとなる象徴であると言う（同上 96）。なぜか。

言葉を発しても物が現れない場合を考える必要がある。その時、言葉が指示する対象ではなく、対象の不確かな写し、心象が生起する。実際には、対象が現れたとしても、心象は現れている（同上 97）。言葉の指示する外在的な対象が外延、内包はその言葉で呼ばれるために備わっていなければならない複雑な特性、あるいは特性の集合である（同上 95）。それは心象として与えられる。内包＝心象の特徴はその不確かさにある。その本来的な不確かさは意味の内的構造、無限の柔軟性を反映しており、それゆえに多様な事実に対応できるし、強力な手段である一方で、不可視なのでその力強さは悪意ある呪術の実践にも利用される（同上 96）。一般に内包的な意味は意味論的構成において二次的重要性しかなく、二次的な意味としての含み、情緒的な色づけと見なされる（同上 106）。だが井筒は認知的要素として働く内包的意味の構成要素であるゆえに指示的意味の重要性を認めつつも、それが本源的な要素であるとは限らないとする（同上 107）。こうして、内包＝心象は心理学的な出来事であり、その前論理的な状態が重要ということになる。

第 6 章は不鮮明な内包的意味を前論理的な状態において示す様相にしたがい四範疇、すなわち指示・直観・情緒・構造の構成要素に区分したうえで、指示要素に集中する（同上 111）。指示要素は概念の核となり、内包における唯一の認知的構成要素である。その機能は現実を記述し描写することである（同上 129）ので、対象の確かさが原因となってこの指示要素を通して内包と外延との取り違えが生じる。それは「対象への間接的な指示を直接的な指示と取り違えている」（同上 111）のであり、内包という「心的内容を外的世界に投影する」錯誤を犯してしまっているのだ（同上 113）。なぜこれが錯誤かというと、内包的意味指示の対象は、外延（現実世界の部分を物理的になす個体）ではなく、「単なる可能的な存在として存在している」（同上 114）ある種の存在者であるが、それはあくまで心的存在であって、この「可能的対象」（同）は「仮言的知覚可能性」（同上 119）の定立に過ぎないのに、「实在対象」（同

上 114) と取り違えられるからである。

しかも、内包の指示要素は個的实在を指示するのではない。实在対象ではなく、心的内容（＝可能的対象、仮言的知覚可能性）を可能的対象として指示するのであり、実在的な裏づけがあろうがなかろうが指示が成立している。ここから、可能的対象である言葉の内包的意味を形而上学的实在と見なす誤り、「変わることなく意味されている同一の物があるはずである」（同上 115）という信念が発生する。内包を外延と取り違え、形而上的に実在化することが、意味を実体化する仕組みであり、これを井筒は「呪術的な働き」（同上 120）と呼んでいる。井筒からすれば素朴实在論は「言語化された思考の不完全な分析に基づいている」（同）、いわば呪術的な思惟ということになる。

第7章の前半は内包的意味要素のうちの直観的要素を主題化している。それは指示的記述とは異なる仕方で、概念的意味（＝指示）と情緒喚起の中間項として、現実を描写する（同上 129）。つまり、言語外の現実（外延対象が提示される経験・状況）を指示する点で指示的であるが（同）、現実を表す仕方が情緒喚起に類似し、密接に結びついている点で喚起的である（同上 130）。これが直観的であるのは、外的な対象・状況・特徴をその直接的な具体性において追体験させるという性格による。したがって、外延対象自体ではなく、それを取り囲む生き生きとした具体性（色彩や香り）が喚起される（同）。ただし、これは言葉の外延対象と連想的に結びついた言語外の状況の喚起である（同上 132）という点が重要である。言語外の状況という具体性とは言え、連想的な結びつきの喚起であるので、当該の言葉が連想的に連結している空間、その言葉の適用性の領野は实在世界と想像世界において限定され、確定される（同上 131）。

この連想喚起は、言語外的には生き生きとした現実（物、質、出来事、状況）をその本来性において追体験することであり、言語内的には一連の言葉で形成される「内包の網」を喚起することである。これを井筒は文法用語を転用して意味論的呼応と呼ぶ（同上 133）。このような形の直観による記述は「現実」「対象」を強調し規定しているのではなく、当事者にとって生き生き

とした現実の体験を喚起することで、感情や態度に生じる効果を強調する（同上 139–140）。この働きかけは、適切な言葉、強い感情表現だけでなく、どの言葉でも声の調子の変化によってその言葉が強調されることで達成される（同上 143–145）。

強調するのに適した言葉や強い感情表現の選択、声の調子による強調は、第7章の後半が扱う情緒＝感情的要素に対応している。言葉の情緒＝感情的要素は、これら内包の指示的および直観的要素による記述がもたらす。感情的な意味の大部分は記述の意味に由来する（同上 139）。構造的要素がもたらす枠組み、およびこれに加えてさらに別の外的枠組みと内的枠組みの成立を通して、内包の情緒＝感情的要素はそれに固有の情緒＝感情喚起機能を真に発揮する。したがって、この要素は外的および内的枠組みの構成を扱う第10章と枠組みづけられた言語を扱う第11章とともに、内的世界の表出という観点からまとめて取り上げることにはしたい。

第8章は内包の構造的構成要素を扱う。そしてこれもまた非実在的区分を実体化させる意味体験という点で、井筒にとっては呪術的機能である。内包的な構造とは、言語に内在する構造であり、それは実在構造からは自律的に働いて構造的意味を生み出す（同上 148–150）。つまり、言葉を組み立てる諸パターンとしての統辞構造はあくまで言語の構造であり、それはそのまま言語のパターンを表す場合もあれば、思考のパターンを表す場合もある<sup>8</sup>。言語の構造は、思考形式からも実在構造からも自律的であり、それ自身の仕方では機能している（同上 164）。それを井筒は意味構成に内在する構造的喚起と呼ぶ。構造的喚起は言語的区分としての品詞を確定しており、品詞分類は度が過ぎなければ、構造的意味をすぐれて反映する（同上 152）。

ジャバウォック文の用例からもわかるように言語的区分（品詞）は与えられた文によって構造的に確定される（同上 151）。その意味で、構造性は言語

<sup>8</sup> 例えば I see a tiger と I kick a tiger とは、これらの表現が表す思想は異なるが、言語構造は同一である（同上 149–150）。



に内在している。もちろん、言語的区分はある程度まで現実の区分に対応しているので区別することが肝要である（同上 153）。しかし、それゆえに言語的区分（品詞）と客観的区分が混同されやすく、伝統的な品詞の分類に批判が向けられることもある。だが、構造的要素という観点で着目すべきなのは、言語で表現されているのは現実の客観構造ではなく、人間がそれによって混沌とした感覚的印象を一つの明確な対象あるいは活動として表現する主観的運用の結果である（同上 157）。それゆえ、言語的表現は、実体・性質・活動（それぞれ名詞・形容詞・動詞という品詞に対応）という擬似的単位を発生させる。この実体化があらゆる呪術の基礎であるので、呪術の発生と言語の本性は成立の場を同じくしていると井筒は見なす（同上 171）。

では、この実体化は避けえないのであろうか。単語一個では外延が何であろうと、その品詞によって客観の様態が混同されかねないだけでなく、指示するのは極めて抽象的な、生き生きとした現実状況を直観させない、ただの仮言的知覚可能性を指示するにすぎない。しかし、複数の単語を組み合わせることで、可能的対象ではなく、その外側にある特性の複合を表象することができる（同上 162）。こうすることで、その都度の体験に対応する「内包の網」という構造が喚起され、内包的意味を形而上学的実在と取り違えることが回避されると言えるのではなかろうか。それゆえ、真に体験に即した意味の生成とは、構造的な本性を有しているということも提起できるのである。

#### 4 枠組み

第9章はそれまでの全8章全体をまとめ、すなわち「自発的儀礼」と「言語起源」の観点から本書の核心をなす情緒＝感情の発露をもう一度整理し直すとともに、第10章と第11章で示される最終段階、言語とはコミュニケーションの道具であるよりも内的世界の表出を本性とするという結論への準備を行っていると言えよう。この節では、内包の情緒＝感情的要素に固有の情緒＝感情喚起機能を十全に展開する仕組みとして枠組みを扱うが、この枠組みもある種の構造である点が注目されねばならないと思われる。

情緒＝感情喚起は心の高ぶりであり、それは言語の高ぶりに対応している。言語を高める、つまり日常から非日常の言語へと転換する装置、前提条件が「枠組みづけ」の過程である（同上 190–191）。非日常化には標準化・形式化された儀式・祭礼などのような外的な「枠組みづけ」の他に、言語自体の内的構造に働きかける内的な「枠組みづけ」がある（同上 203）。外的・内的というのは、言語に対して外的か内的かという区分である。外的な「枠組みづけ」は第 10 章の主題、内的「枠組みづけ」は第 11 章の主題になっている。

外的な「枠組みづけ」では、状況が非日常化されるので、その条件のもとで言語も非日常化し、情緒も高ぶる（同上 191–193）。この効果が高められるのは内的な「枠組みづけ」が同時に働く場合である。なお、定型文の使用（同上 193）、記述の形式での意志や願望の表現（同上 194–198）、宣誓形式としての指差す行為（同上 199）、未来時制による意志や願望の表現（同上 200–201）は、標準化された儀式以外の外的な「枠組みづけ」とされている。

これに対して、内的「枠組みづけ」は三つに分けられている。第一に、語の感情的使用である。それは、声を情緒的に転調すること、語順の変化、強調辞の使用からなる（同上 207–208）。これらは、文法的な問題と密接に関わる。その連関で、過去時制・完了を命令機能として用いることで願望を示すという用法も挙げられている（同上 210–211）。ただし、これが外的な「枠組みづけ」としての未来時制の意志・願望的転用とどう違うのか、どこで外的・内的の区別がなされるのかは示されていないように思われる。第二に、誇張された曖昧さの使用である（同上 212）。これは、異国語や擬古文のような異質な要素、不可解な言葉をあえて散りばめることで、その部分は意味が曖昧になるがそれによって情緒＝感情への働きかけが達成される。第三は、律動的に歌うこと、韻律形式、韻文、詩歌という形式の使用である（同上 213–222）。

言語の律動性は言語に内在する「枠組みづけ」であり、この内的「枠組みづけ」が発動されることで、つまり日常的な散文が韻文に転じることで「枠組みづけられた」言語が生起し（同上 216）、言語は高ぶり、当事者（聞き手も、話しは話し手に回帰するので同時に話し手も）高ぶる。そのような高ぶ

りを生起させるための手段として、律動や韻律が用いられる。その効果を井筒は三つに分けている。すなわち、自己を含む聴衆を活気づかせること、感情に掛け口を与えること、感情を引き起こすこと、である（同上 220-221）。

このように見てくると、井筒の関心は情緒＝感情、つまり心の様態と言語との関係にあることは明らかである。言語とは、井筒にとっては、心のうちからその様態を表出するものであるとともに、心に特定の様態をもたらすものでもある。特に心に何らかの様態をもたらすためには、言語に内在する構造、あるいは杵組みを用い、またその効果を確実にするためには言語に外在する杵組みをも利用する必要がある。それだけではなく、心の様態を表出するためにも、統辞構造によって構造的に言語区分化がなされねばならない。この言語区分は翻って、杵組みとして当事者の心の様態に影響し、多くの場合は擬似的な存在単位をもたらす。これら複雑に錯綜する効果の及ぼしあいが呪術と呼ばれている。

## 5 おわりに

ここでもう一度、内包の構造的に着目したい。それは、井筒が呪術的機能の考察から導き出した言語の本性の一つとしての統辞構造である。そのような構造は実際には一連の言葉で形成される「内包の網」の裏づけがあって、その中で言語的区分が構造的に喚起され確定されるものである、と井筒は主張しているように思われる。それゆえ、品詞のような文法形式が人間の思考にとって必然的かつ普遍的な形式であるというのは誤りで、言語形式は偶然の産物であって、自然言語に基づく「普遍文法」は不可能であるという見解を井筒は提起する（同上 148）。しかし、個々の構造の働き方は言語ごとに異なろうとも、構造的自体はすべての言語に備わっている。その意味で「構造的喚起」、あるいは「杵組みづけ」は普遍的である。

この点で、自らの生成文法の試みを「デカルト派言語学」と名づけたチョムスキー（1966）の観点と通じていると思われる。チョムスキー自身も自然言語に基づく「普遍文法」の策定が可能だとみなして近世から近代にかけての「普

遍文法」を復活させたのではない。彼が普遍的と見なすのは、言語的本性としての統辞構造が心にもとより備わる事実である。そして、呪術の分析と意味生成の分析を通して、井筒は同じく統辞構造が言語の本性である点に至った。「徹底した理論的分析のみが〈意味〉の現象からその隠れた呪術的な核を掘り起こすことができる」(井筒 2018: 88)。そしてその呪術とは「言語的な振る舞い一般に隠れている仕組みを解き明かす鍵をあたえてくれる」(同)。

そのような探究の態度、方法論によって、井筒は〈意味〉の生き生きとした体験、「根源体験」(同上 89)を描き出すことに成功した。言語の語形や統辞論的パターンが構造的に意味を確定するのであり、したがって言語構造は客観世界の構造からも思考形式からも独立し自律している。そのような言語的模式は言語の中に組み込まれている、ゆえに客観を「現実世界」として構築する方法は現実世界にではなく言語の側にある。言語は客観を体験しその体験を象徴に転じる心、主観の表出である。井筒の見出した観点をまとめるなら、このようになろう。

井筒の試みは、私見によれば—そして私は確実であると考えるのだが—、20 世紀におけるいわゆる「認知革命」と動向を同じくしている。生物言語学においては人間知性の基本特性として言語機能が統辞構造として働く仕組みを、数理論理学の手段を援用して記述してゆく。井筒は「内包の網」という内的枠組みとしての意味構造を、後々、アラビア語を対象として記述して行く(竹下 1993)。『言語と呪術』における寄与は、両者が共通の枠組みから発生し、人間知性の基本特性であり、特にその特性の本質を枠組みづけという働きに見出した点であると思われる。この点で、人類学的事例研究を人間知性の解明へと転換した功績は大きく、その共時的態度は、アラビア語研究の後に行われる東洋諸思想を歴史的事例研究から人間知性の構造的解明へと転回したことと一致している<sup>9</sup>。井筒の研究は、確実に人間知性の解明の方向

<sup>9</sup> 安藤(2018: 231)の慧眼は『言語と呪術』第11章でムハンマドが言及される所以が、ムハンマドの同時代の共時態を、内包的構造をムハンマド独りによって劇的に転換すること通時態の変容を歴史の証人の前で成功し、クルアーンという決定的な証拠を残した点にあることを明快に提示している。

に開かれている。私個人の展望は、生成文法と異なる仕方で井筒が見出した枠組みづけとしての統辞構造を進展させ、井筒が見出したのとは異なる枠組み形成が、言語を規定し、意味を確定するために働いている点をアラビア語研究によって提示することである。

### 参考文献

- 安藤礼二 (2014a [2017]) 「呪術と神秘——井筒俊彦の言語論素描」『増補新版 井筒俊彦——言語の根源と哲学の発生』安藤礼二・若松英輔 (編), 81–88 頁.
- 安藤礼二 (2014b) 『折口信夫』講談社.
- 安藤礼二 (2018) 「井筒俊彦の隠された起源」『言語と呪術』井筒俊彦, 安藤礼二 (監訳)・小野純一 (訳), 慶應義塾大学出版会, 225–252 頁.
- 井筒俊彦 (2018) 『言語と呪術』安藤礼二 (監訳), 小野純一 (訳), 慶應義塾大学出版会.
- 井筒豊子 (2017) 『井筒俊彦の学問遍歴——同行二人半』慶應義塾大学出版会.
- 坂本百大 (1991) 『言語起源論の新展開』大修館書店.
- 澤井義次 (2018) 「東洋思想の共時的構造化へ——エラノス会議と「精神的東洋」」『井筒俊彦の東洋哲学』澤井義次・鎌田繁 (編), 慶應義塾大学出版会.
- 竹下政孝 (1993) 「井筒俊彦のイスラーム学における業績」『イスラム世界』第 42 号, 159–164 頁.
- ノーム・チョムスキー (1976) 『デカルト派言語学』みすず書房.
- ノーム・チョムスキー (2012) 『言語基礎論集』岩波書店.
- ノーム・チョムスキー (2017) 『統辞理論の諸相』岩波書店.
- 長岡徹郎 (2018) 「井筒俊彦研究文献一覧」『井筒俊彦の東洋哲学』澤井義次・鎌田繁 (編), 慶應義塾大学出版会, 巻末 5–34 頁.
- 福井直樹・辻子美保子 (2017) 「訳者解説」『統辞理論の諸相』ノーム・チョムスキー, 岩波書店, 181–216 頁.

- Chomsky, N. (1949 [1979]). *The Morphophonemics of Modern Hebrew*, New York: Garland.
- Chomsky, N. (1953). System of Syntactic Analysis. *Journal of Symbolic Logic* 18, 242–256.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structure*, The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1975) *The Logical Structure of Linguistic Theory* [1955].
- Donovan, J. (1891). Festal Origin of Human Speech. *Mind* 16 (64), 498–506.
- Donovan, J. (1892). The Festal Origin of Human Speech. *Mind* 1 (3), 325–339.
- Izutsu, T. (1956 [2011]). *Languagen and Magic: Studies in the Magical Function of Speech*, Keio University Press.
- Langer, S. K. (1942 [1951]). *Philosophy in a New Key: A Study in the Symbolism of Reason, Rite and Art*, Cambridge: Harvard University Press.
- Lenneberg, E. H. (1967). *Biological Foundations of Language*, John Wiley & Sons, Inc.
- Malinowski, B. (1923). The Problem of Meaning in Primitive Languages. C. K. Ogden and I. A. Richards, *The Meaning of Meaning: A Study of the Influence of Language upon Thought and of the Science of Symbolism*, London: K. Paul, Trench, Trubner & co., ltd., 296–336.